

ようこそ目黒区へ

「將軍として命じる！ さんまを持って参れ！」

秋晴れの田道広場公園に響き渡る大音声。その声の主を取り囲むように人だかりができていく。

「ここは目黒であらう？ 目黒といえはさんまじゃ。余はさんまに目がなくてな、脂の乗ったさんまの香ばしい匂いがたまらん！ さあ、早うさんまを持って参れ」

立て板に水を流すようにまくしたてる着物姿の男。なんと髪はチョンマゲを結っている。

この日「目黒区民まつり」の取材で、公園に居合わせた目黒区広報課Aさんはこの様子に興味津々。

「今年の落語コンテストの優勝者は本格的だなあ。本当に江戸時代からタイムスリップしてきたみたい」

毎年、秋に開催されるこの祭りは、模擬店やステージ、子どもたちが遊べる広場、ふるさと物産展など来場者数3万人を超える目黒区の一大イベントである。

アマチュアの落語家が新作落語を披露する落語コンテストも事前に開催され、優勝者はステージで披露することになっていた。

しかしなんととっても最大の目玉は、目黒区の友好都市気仙沼から送られた新鮮なさんまを炭火焼きて提供する「目黒のさんま祭」

脂の乗ったさんまに大分県臼杵産のカボスをかけて、美味しく食べる笑顔がそこかしこに見られる。

「なに？ さんまは事前申し込み制？ えーい、お主ではちが明かぬ、知恵伊豆をここへ呼べ！」

優勝者のリハーサルかと様子を見ていた広報Aさんも、ただならぬ様子を察して話しかけた。

「あの、もしかして本物の將軍様ですか？ 鎌倉？ 室町？ それとも江戸？」

「異なる事を申す娘だ。余こそ江戸幕府三代將軍、徳川家光である。頭が高い！ 控えおらう！」

「は、はい、すみません！ 思わず謝罪してしまっただけで、3カ月前にも同じようなことがあったことを思い出していた。」

「義経さん、弁慶さんの次は家光さんか、いったいどうなってるの？」

「ちょうどその時、偶然にも義経らしき男が目の前を横切った。」

いつものかぶとを被っているが、その下はTシャツ短パンという奇妙な格好。

「やあA殿、久しいな。教えてもらった菊棒も、ほれこの通り馬のように乗りこなしておる」

「菊棒じゃなくて、キックボードですよ。ちゃんとヘルメットもかぶって偉いです」

「うむ、武士の頭を守るのかぶとと決まっておるからな。ところで何やらもめておったようじゃが」

「実は義経さん達と同じように、過去から徳川家光さんという方がいらっやまして……」

「おお！ 家光か。実はあれから少し歴史を学んでな、徳川といえば清和源氏の流れをくむ者だという、どれわしが話をつけてやろう」

しばらく言い争いを続けていた二人だったが、誤解が解けたのか時折笑顔が見えるようになり、終には肩を組んでビールで乾杯していた。

「いやあ、軍神義経公みずから源平合戦の話が聞けるとは武士冥利に尽きますな」

「お主も話のわかる男で助かった。しかし、それほどさんまが好きならわしの予約券を譲ろう。一枚しか無いが存分に味わうといい」

「なんと！ 誠にかたじけない。ではさっそくさんまを所望いたす！」

「家光さん、良かったですね。どうぞお召上がりください」

「まさしく天下の美味！ やはりさんまは目黒にかぎる」

「落語「目黒のさんま」の一節を直に聞いた広報Aさんも大満足。骨も残さずきれいに食べ終わり、名残惜しうに家光が愚痴る。

「しかし一人一尾とは寂しいのう。余の知るさんまは下魚と呼ばれ、魚河岸へ行けば山のように積まれていたものじゃが」

「広報Aさんが申し訳なきように答える。」

「近年は温暖化や海洋環境変化の影響で、さんまの不漁が続く、今日もなんとか事前予約分だけは確保できたんです」

「ううむ、さんま好きとしては由々しき事態。なんとかならぬか」

「世界中で海の豊かさを守るための活動が行われてはいるんですが、みんなが自覚を持って行動できているかというと……私もあまり自信がありません」

「余も海を守るために何かできぬだろうか？」

「真剣な表情の家光。そこには江戸幕府將軍としての覚悟と責任が表れていた。

「それならまずは、足元の紙皿をきちんとゴミ箱に捨てることから始めましょうか」

「やや、これは一本取られたな」びしゃりと額を叩き、破顔一笑の家光。その様子をみて、足元に転がったビールの空き缶をそっと拾う義経。

「わはは、A殿にはかなわんな。ところで家光はこれからどうする？」

「ここが目黒なら、江戸城は近いはずじゃが」

「江戸城はもうありませんよ？ いまは皇居になってます」

「なんとこの時代、帝は江戸にお住まいか！ では將軍の居城は？」

「將軍はやくと総理大臣で、幕府も無くなって150年以上経ってます」

「わしのいた時代に比べれば随分と最近に感じるな。」

「ではどうじゃわしら同様、この目黒に住んでみては？」

義経からの誘いに我が意を得たりとばかりに膝を打つ家光。

「それはありがたい申し出。目黒のさんまが食べ放題じゃな」

目黒でさんが獲れないことを家光が知るの少し先の話。ともあれ目黒区にまた新たな住人が加わった。



14 海の豊かさを
守ろう

